

本稿では、1990年代において通貨危機にあった多くの新興市場国が経験した連鎖的な銀行危機について考察するべく、通貨危機のもとでの銀行間におけるシステミック・リスクを扱ったモデルを展開する。銀行間における預金取付けの相関は、自国通貨建て預金に対してドル建て預金の割合が大きいほど高くなり、さらにドル建て預金の割合がある値を超えるとすべての銀行において預金取付けが起こるか、あるいはどの銀行においても起こらないかのいずれかになるような完全な相関をもつ。この結果、ドル建て預金の割合が高いもとではインターバンク市場が機能しなくなり、政府による最後の貸し手機能およびドル準備金がより重要となることを述べる。